

こどもと家庭を地域につなぐ保育の考察

— レッジョ・エミリア・アプローチ、まちのこども園 代々木公園、
芸術士のいる保育所の実践から —

奥 恵

Consideration of Childcare Activities who Connects Children and Family to the Area

— A Practice of Reggio Emilia Approach and Machi-no-kodomoen community school,
Geijyutsushi-no-iru-hoikuen —

OKU Megumi

キーワード：レッジョ・エミリア・アプローチ、
まちの保育園・こども園、芸術士の
いる保育所、アクティブ・ラーニン
グ

1. はじめに

現代の社会はグローバル化が進んでいるが、我が国では身近な地域関係の希薄化によって子育て家庭の孤立化などの問題が報道されている。このような時代の変化に対応すべく、平成 29 年 3 月 31 日に保育所保育指針、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領が改定され、また、同時に学習指導要領も改定された。今回の改定では、乳児保育・教育を行う施設として「育みたい資質・能力」及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が明らかにされ、今後、保幼小の連携や保育の公平性がより推進されていくと考えられる。この「育みたい資質と能力」と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を意識したこどもの発達や生活の全体的な計画を作成するにあたって、丸田（2018）¹⁾ は、主体的・対話的で深い学びとなるアクティブ・ラーニングの一つとして学生の「遊び体験」学習スタイルを取り入れていくことの重要性を指摘している。このようなア

クティブ・ラーニングを取り入れた授業展開は埼玉東萌短期大学（以下、本学）でも求められており、各科目内容における主体的な学びの意義や実践の研究が進められている。また、自然環境などとの関わりや生活体験の機会が減少している現代社会においては、こどもたちが実際に体験し、考えを友達と伝え合う主体的な遊びの機会が求められている。しかし、小島（2018）²⁾ は、こどもの考えた遊びが大人の考えたものに変化し、こどもの育ちが「できる」「できない」という結果で評価されているという現代の保育の課題を指摘している。このような課題を改善していく為には、保育者主導の一斉保育になっていないか、こどもの豊かな思考力・表現力・想像力を引き出す保育内容となっているかなどの再検討が保育現場で行われることが必要であるが、保育者養成校における授業内容や学生指導においても再検討が必要だと考えられる。

また、丸目（2018）³⁾ は、保育所保育指針でこれまで「保護者支援」と表現されていた言葉が「子育て支援」に変化したことから、「保護者・家庭及び地域と連携した子育て支援の必要性」を強調している。乳児期における保護者との愛着形成を重視し、保育者が保護者と共にこどもを育てるという姿勢で信頼関係を築いていくことが、これ

まで以上に求められてきているのである。それと共に、地域で子育て支援に携わる他の機関や団体など様々な社会資源との連携や協働を積極的に行っている質の高い保育者の育成が求められていると言える。しかし、連携と言っても、ただイベントや交流会の回数を増やす保育になってしまっただけでは、こどもの主体的な活動にはならず、保育者主導の保育になってしまう可能性もある。相浦(2018)⁴⁾は、保育者はこどもと共に保育の現場に参加しているものであり、意図的な環境を構成する者でありながら指示者ではないことを主張している。このように、こどもを中心としながらも、保育者や保護者、地域住民が共に保育に参加していただける活動内容や人的環境のあり方について研究していくことが必要である。その為、本研究ではこどもの主体的な保育活動の意義や連携のあり方を保育実践の分析から検討し、アクティブ・ラーニング授業に取り入れることを目的とした。

2. 研究目的

こどもの主体的な保育活動の意義と連携のあり方を研究するにあたり、近年、我が国の保育現場でも取り入れられているプロジェクト保育や環境を通じた保育の先行研究が進んでいるイタリアのレッジョ・エミリア市の乳児保育所と幼児学校の取り組み、日本でこどもを中心としたまちづくりの実践をしている東京都のまちの保育園・こども園の取り組み、市町村が地域の人材と保育現場の連携を推進している高松市の芸術士のいる保育所の取り組みを対象とし、保育活動の意義や人的環境から連携のあり方を明らかにすることを目的とした。そこから、地域と連携した保育の意義を、保育者養成校の学生にどのように伝えていくかについて、授業実践をもとに今後の課題を検討した。

3. 研究方法

レッジョ・エミリア市の乳児保育所と幼児学校、まちの保育園・こども園、芸術士のいる保育所の

取り組みを考察するために、関連書籍の分析と保育現場の見学を行った。レッジョ・エミリア・アプローチについては関連書籍3冊『驚くべき学びの世界：レッジョ・エミリアの幼児教育』、『こどもたちの100の言葉－レッジョ・エミリアの幼児教育』^{a)}、『レッジョ・アプローチ 世界で最も注目される幼児教育』^{b)}の内容から理解を深め、本研究においては『驚くべき学びの世界：レッジョ・エミリアの幼児教育』の中で佐藤が示した箇所を参考に、理念と保育の特色、こどもを取り巻く人的環境の内容を考察した。まちの保育園・こども園の取り組みについては、関連書籍2冊『まちの保育園を知っていますか』、『私たちのまちの園になる－地域と共にある園をつくる－』^{c)}から松本が述べた箇所を参考に、理念と保育の特色、こどもを取り巻く人的環境の内容を考察した。さらに、まちの保育園・こども園を代表して「まちのこども園 代々木公園」を2018年9月4日に見学して話を伺った内容について集約した。芸術士のいる保育所(NPO法人アーキペラゴ)については、芸術士の年度活動報告冊子7冊とインターネット上のNPO法人アーキペラゴのホームページ^{d)}を参考にし、2018年8月6日に高松市の保育園で行われた芸術士の活動視察プログラムに参加した際の内容を元に、理念と活動内容、こどもを取り巻く人的環境を考察した。これらの研究で得た内容を、本学の「こども学」の授業内で紹介し、学生たちにこどもと家庭を地域とつなぐプロジェクトのアクティブ・ラーニングを実施した結果も踏まえて、今後の地域と連携した保育の意義と課題を検討した。

研究における倫理的配慮については、以下のことについて遵守し行った。まず、研究対象団体宛に、研究の目的と見学希望の理由、研究者の所属先と連絡先をメールで送信し、見学の許可を得た。事前に撮影や録音をしないことの依頼があった団体については筆記のみを行った。見学した際に研究の参考とする旨の許可は得たが、完成原稿の内容の確認をもって同意書に直筆のサインを得ることとした。また、本研究に関わって収集した情報

の管理には万全を期すとともに、研究上知りえた個人情報に他を漏らさないようにし、見学園の実名や特定できる表現を避けた。但し、同意が得られた場合は、この限りではない。また、学校法人小池学園研究倫理公正委員会の倫理審査と承認を受け実施した。

4. レッジョ・エミリア市の乳児保育所と幼児学校における人的環境と連携

(1) レッジョ・エミリア・アプローチの理念

佐藤 (2011)⁵⁾によるとレッジョ・エミリア・アプローチは、第二次世界大戦直後の北イタリア、レッジョ・エミリア市で、人々が戦車や軍用トラックを売り払い、独自で始めた学校教育法である。そこに、ローリス・マラグッツィという教育者が加わり、「こどもは100人いれば100人の個性があり、100の可能性がある」という理念のもと、デューイ、ピアジェ、ヴィゴツキー、ブルーナーなどの理論を統合し、アートの創造的経験によってこどもの可能性を最大限に引き出す画期的な教育実践を行ってきた。その後、1970年代からヨーロッパ、アメリカへと広まり、1991年の『ニューズウィーク』誌の「世界で最も優れた教育」に取り上げられたことから、全世界に注目されるようになった。

(2) レッジョ・エミリア市の乳児保育所と幼児学校の保育の特色

レッジョ・エミリア市では、乳児保育所（0歳から2歳）と幼児学校（3歳から6歳）に分かれており、「ピアッツァ」と呼ばれる共通の広場と、教室に大小2つの「アトリエ」が設けられている。アトリエには、自然物と人工物の本物の素材が豊富に用意されており、こどもが自らモノと関わり、自分の使いたい材料を選んで遊べる創造性を育む環境づくりが重視されている。それらを活用して数ヶ月から1年かけて小グループで学んでいく「プロジェクト保育」が、こどもたちによって主体的に行われ、共に考えて表現していく中で自主性と協調性が育まれている。このような活

動は、「ドキュメンテーション」と呼ばれる写真や説明文などを使った視聴覚的な方法で、最終的な作品だけでなく作る過程や話し合いの様子、個性や個々の学びを記録・展示し、共有することによって学びの共同体づくりが推進されている。保育内容のアートの領域は、美術や音楽、文字、舞踊など幅広く、プロジェクトのテーマも「光」や「色彩」「モノ」「場所」「身体」「言葉」「エコロジー」など多様である。つまり、レッジョ・エミリア・アプローチでは、ヒト・モノとの対話によって、こどもが自分の内面と向き合うことを大切にしているため、作品の出来栄や結果に意味をおくのではなく、過程でこどもたちが何を学び、気づき、表現したのかを認め合うことを重視している。

(3) レッジョ・エミリア市の乳児保育所と幼児学校におけるこどもを取り巻く人的環境

保育者の役割は、こどもたちが、他のこどもと考えていることを交換し合い、観察し、分析し、発見し、考えをまとめる過程をアシストすることである。佐藤 (2011)⁶⁾によると「何かを教えるおとな」ではなく、こどもたちと同じ学びの環境と一緒に身を置き、見守り、質問し、ヒントを与え、道案内をする役割を担っている。保育者自身が探究することを楽しみ、こどもの探究する楽しさに共感することを大切にしている。次に、「アトリエスタ」と呼ばれる芸術の専門家と「ペタゴジスタ」と呼ばれる教育学の専門家が配置されており、教室ごとに二人いる保育者と協力して保育が実践されている。アトリエスタは、教育学の知識と同時に、美術の専門的知識が必要とされ、通常、大学で美術を専攻した人が任命される。アトリエスタの役割は、こどもたちの創造的プロセスと、すべての言葉と同時に、音声による言語で表されない「言葉」の価値を尊重し、さまざまな形で表現活動をサポートすることである。ペタゴジスタは、大学で教育学を専攻した経歴を持ち、幼児学校に配置されて教室での実践を教育研究と結びつけ、複数園を統括して受け持つことで、保

育者と保護者の連携を築いている。

5. まちの保育園・こども園における人的環境と連携

(1) まちの保育園・こども園の理念

まちの保育園・こども園は、ナチュラルスマイルジャパン株式会社の代表取締役である松本理寿輝によって2011年に設立され、「まちが保育園になる」という視点と「保育園がまちの頼れる存在になる」という二つの視点から名付けられた。松本(2017)⁷⁾によると「まちが保育園になる」とは、こどもの育ち・学びに、まちの「資源」を生かすことが、こどもたちの一層充実した環境につながり、子育て支援の助けになるという視点である。また、「保育園がまちの頼れる存在になる」とは、保育園がまちづくりの拠点として、地域が豊かにつながりあうことの一助になるという視点である。現在、まちの保育園は小竹向原、六本木、吉祥寺の3園が運営されており、認定こども園のまちのこども園 代々木上原、代々木公園の2園が2017年に開園した。

まちの保育園・こども園では、一人ひとりの存在そのものを喜び、互いに育みあうコミュニティを創造するために、3つの力を大切にしている。1つ目は豊かな可能性を秘めた「こどもの力」である。プロセス主義の視点を大切にし、「こどもが今、どのような芽を自ら伸ばそうとしているか」をゆったりとしたまなざしで見つめ、その芽が素直に強く育まれるにはどのような環境や配慮があるかという問いを日々大切に考えている。2つ目は「コミュニティの力」である。コミュニティがこどもに与えるよい影響と、こどもがコミュニティに与えるよい影響を信じており、こどもに多様な人格に出会う機会を提供していくことを考えている。3つ目は「対話の力」である。こども、保育者、保護者、まちの人が互いの思いを交換し、話を進めるプロセスを大事にしている。

(2) まちの保育園・こども園の保育の特色

保育時間のすべてを「探索・探究の時間」と捉

え、こどもが何をしたいかをこどもたち自身で考えて活動している。基本的に、一斉保育や準備、練習を必要としたり、保護者に見せることを主目的とした行事を行わないようにしている。

今回、見学で訪れた「まちのこども園 代々木公園」では保育の計画は立てているが、こどもたちの興味や関心を大切にしているため、その日のこどもの姿や天気、環境などによって計画は柔軟に構成されている。

日々の保育では、朝の会でこどもたちが自発的に話し合い、小グループに分かれて活動が始まる。見学した時間帯には、収穫したとうもろこしのコーンの数が何個あるのか気になり数えているグループ、とうもろこしのヒゲを筆にして絵を描くグループ、丸めた段ボールの側面に絵具を付けて車を製作しているグループなどが見られた。物的環境としては、絵本やままごとのコーナー設定が行われている他、アトリエの環境づくりがなされていた。アトリエの素材は産業廃棄物の処理施設と連携し、廃材を素材として利用することにも取り組んでいる。他にも有田焼の土粘土や空き箱、工業製品の部品、ホース、キャップ、毛糸など様々な素材が常備されていた。また、保育者はこどもたちの姿からこどもをどう捉えるか、こども理解の深さを重視している。こどもの言葉・想いの可視化を丁寧に行い、その場にはいない保育者・保護者にも伝わるように記録した「ドキュメンテーション」を制作し、掲示している。保育室内の描画作品には、こどものつぶやきも描かれており、こどもの想いが伝わるようになっている。また、職員同士での対話の時間を、月1回2時間持っている。

(3) まちの保育園・こども園におけるこどもを取り巻く人的環境

まちの保育園・こども園ではこども、保護者、保育者と地域をつなぐ存在として「コミュニティコーディネーター」(CC)という専任職員を配置している。コミュニティコーディネーターは事務の仕事を受け持ちながら、保育のサポートにも入

る。松本（2017）⁸⁾によると「すべての人にとって話しかけやすい存在になる」ことを大切にしながら、こどもについて理解を深め、こどもを中心に保育者、保護者の信頼関係を育むために働いている。そして、保護者や地域とのコミュニケーションを取る中で、保育に活かせる素材を見つけていく。このようにして、地域と園の橋渡しをするだけでなく、こども・保育者・保護者のコミュニケーションをコーディネートしていき、まちの資源を園へ、園の資源をまちへ届け活かすことに貢献している。

小竹向原園では「まちの間」という地域と園をつなぐスペースを設けており、講演会や音楽会などのイベントに利用されている。また、園を地域のコミュニティの拠点にしたいという思いから、園の様子が窓越しにうかがえるカフェ「まちのパラー」を併設している。六本木園には、地域と園で対話しながら作った砂場や畑のある庭「まちのガーデン」がある。また、園と地域をつなぐ店「まちの本とサンドイッチ」が併設している。吉祥寺園には、地域との対話やイベント、子育てひろばが行われているコミュニティスペースがある。これらのような、園の環境と空間を活かした地域と園をつなぐスペースによって、こどもと地域の人や、保護者同士などが出会う機会をつくり、こどもを取り巻く人的環境を豊かに構成している。

見学した園では、少しゆとりを持った人的配置をしている。また、アトリエ活動に興味のある芸術関係の勉強をしている学生や、時にはプロのアーティストも入り、アトリエに関する話し合いが行われている。コミュニティコーディネーターも配置されており、園に常駐しながら、こどもの興味・関心が何に向いているかを観察したり、保護者の想いの聞き取りを行ったりしている。例えば、保護者から各家庭にある絵本の貸し合いをしたいという要望があった際には、その機会を設け、園内が保護者にとっても居心地の良い空間となるように取り組んでいる。

6. 芸術士のいる保育所における人的環境と連携

（1）芸術士のいる保育所（NPO 法人アーキペラゴ）の理念

芸術士とは、絵画・彫刻・パフォーマンス・デザイン・工芸などで表現活動をしている作家のことである。芸術士の取り組みは、瀬戸内芸術祭をきっかけに高松市で生活するアーティストの緊急雇用事業として立ち上がり、NPO 法人アーキペラゴが市から委託されて芸術士と園の調整を行っている。無償のボランティアではなく、責任を持って取り組めるように、公立非常勤講師と同等の待遇で市に雇用されている。高松市の市長は福祉分野に対する理解が深く、迅速に活動が展開された。当初は、芸術士 8 名で 25 園程を分担していたが、現在は 24 名で 60 園（高松市内外の公私立の保育所・こども園・幼稚園）を分担している。約 1～4 ヶ所の施設で保育士・幼稚園教諭と連携しながら、週 1 回、造形活動や身体表現などを行っている。また、月 1 回、24 名の講師が集まり、実践報告・発表、想いの共有をしている。芸術士の目的は、こどもたちの無限の可能性を信じ、こどもたちの感性と創造力を最大限に引き出す手助けをすることである。そして、芸術士の目を通して見たこと、気付いたことを保育者、保護者、さらに社会に伝え、こどもたちと社会を繋ぐ架け橋になることを目標にしている。

（2）芸術士のいる保育所の保育の特色

今回、芸術士の活動を見学した高松市の保育園は、開園 7 年目で 5 年前から芸術活動を行っている。芸術士は週 1 回、保育園の各クラスを回って活動を行っている。こどもがやりたいようにすること、自分から作りたいと思えるような活動することを心掛けている。また、何か決まったことをするのではなく、こどもと芸術士自身がしたいと思ったことをするようにしている。こどもに道具の使い方や描き方を教えることが目的ではないため、表現や感情の出し方を伝えることを大切に

ている。この園では、周囲に自然が少ないため、保育士と相談してこどもたちが自然や四季を感じられるような活動をねらいとしていた。保育室内にはこどもたちと作成した大きな木があり、枝は天井に広げて装飾してあった。活動の材料は、芸術士自身がこどもの頃に魅かれたものを取り入れ、ネットショッピングで新しい素材を取り寄せて活動に活かすこともある。道具も様々なものを使っており、他のクラスでは、これまでに和紙を使った「こより作り」やゼリービーズを使った絵画活動などが行われていた。他にも、こどもたちと土器が出土した場所を見に行ったことがきっかけで、イメージした原始人を作る活動に発展した際は、段ボールでこどもの型をとる製作が行われた。

見学した日の活動は、以前にこどもたちと染めた黒や紺が混ざった色の布を指で摘み、その先をはさみで切るところから始まった。空いた穴をのぞき込み、こどもたちの発言から、それらは星に見立てられた。次に、様々な形に切ってある小さな画用紙に、こどもたちが自由に色を塗り、布に貼り付けていく。他にもクラッカーの中に入っている紙やモールなども自由に貼り付けていった。布に空いた無数の穴が夜空の星になり、画用紙やモールなどが流星や惑星のように広がる作品が完成し、園の廊下の天井に飾られた。

また、芸術士はこどもたちと接すること以外の役割として、活動中のこどもの言葉や様子の写真を用いた、「ドキュメント（記録）」を制作している。ドキュメントとは単なるこどもたちの活動の記録ではなく、こどもたちが社会の中で価値ある存在であることを示し、こどもたちが創る未来の社会を垣間見せるものとして扱われている。

(3) 芸術士のいる保育所におけるこどもを取り巻く人的環境

芸術士の活動は、大人がこどもに指示することではなく、こどもたちを見守り、励まし、豊かな感性を育てていくことが重要だとしている。そして、こどもたちに関わる社会が一人ひとりの個性を育み、感性豊かなこどもたちが育つ環境になっ

ていくと考え、活動している。また、芸術士は教えるのではなく、伝えることを大切にしている。活動をこどもに無理矢理させないこと、製作が同じ物にならずに個性を発揮できることを心掛けている。芸術士は気付きをあたえる存在であり、正解を教えるのではない。その為、こどもたちに分からないまま素材を与えることが大切である。こどもに関わるのは保育者だけでなく、様々な人と出会う方が引き出しを豊富に生み出すことができると考えられている。また、大人の求める結果が、こどもたちにとっての正解とは限らないため、芸術士は結果ではなく、過程を大切にしている。そして、こどもたちは何かを発見したり、感動したりすると、それらを他者に伝えたいという気持ちに溢れる。その時に、芸術士はこどもたちそれぞれの個性を尊重し、自らが考え、工夫し、伝える力を引き出すサポートをする役割を担っている。つまり、芸術士は、こどもを愛し、感性と創造性の可能性を実体験として理解しているアートに通じ、こどもと大人の境界を越えて共に交わるコミュニケーション能力を有した存在である。そして何よりも、高松市の未来に、社会の未来に貢献する意識を持ち、そのために自ら行動している。

7. レッジョ・エミリア市の乳児保育所と幼児学校、東京都のまちの保育園・こども園、高松市の芸術士のいる保育所における人的環境と連携の考察

(1) 理念における考察

活動内容が芸術分野であることは共通しているが、重要なのはその手法ではなく、こどもの個性が十分に表現されるために大人が寄り添うコミュニティづくりの実践であると感じられた。この理念は共通しているが、各地域によって活動団体の規模は異なっている。レッジョ・エミリア市のような市民による教育は、その土地の文化の影響が大きい。一方、まちの保育園・こども園は日本の保育観、こども観も大切にしながら、保育園がまちづくりの拠点となることで、地域住民とのまち

ぐるみの保育を実現している。高松市では地域の人材を活かした保育によって、独自のコミュニティが形成されている。まちの人材を保育に活かすことがこどもの成長につながり、まちづくりに貢献できると考えている。つまり、こどもを中心としたまちづくりは、こどもにとって豊かな環境を生み出すと同時に、日本社会の豊かなまちづくりにつながっていると言える。少子高齢化社会の日本が未来の社会を構想する際に、少数派となる弱い立場のこどもたちにしっかりと目を向けていくことが、今後、求められていると言える。

（２）保育の特色における考察

まず、こどもがモノと豊かに「対話」できる環境づくりが保障されている点が特色として挙げられる。ただ環境物が多いのではなく、こどもの創造力を膨らませる適切な素材が選ばれている。それらはこども向けの遊具ではなく、質の高い本物の素材を使用している。自然物や人工物が豊富に用意されていることで、こどものモノに対する興味・関心が高まり、自ら材料や道具を選ぶことで考える力を引き出している。その際に、活動時間を設定せず、一斉保育や行事などを取り入れないことで、こどもが自分のペースで活動に集中し、モノと「対話」できるように配慮している。こどもはモノとの出会いの中で様々な感情を抱き、その心の動きを言語や非言語によって表現する。その内面の表出に、大人が丁寧に時間をかけて向き合い、こどもたちが伝え合って協働していく活動をサポートしていくことに保育の意義があると考えられる。

次に、出来栄や結果を評価するのではなく、こどもがモノと「対話」する中で学び、気づき、表現したプロセスを全体で認め合う点である。活動の過程は一瞬であり、常に変化していくため、大人が写真や説明文などを使った視聴覚的な方法で記録・展示し、保護者や地域住民と共有することによって学びの共同体がつくられていくことに「ドキュメンテーション」の意義があると考えられる。このドキュメンテーションや保育の理念

に関する説明による共有が丁寧に行われることで、保護者の理解が得られている。

（３）こどもを取り巻く人的環境の考察

まず、こどもがヒトと豊かに出会えるコミュニティを構成している点が挙げられる。大人はこどもに教えるのではなく、こどもの主体的な活動を見守り、探究する楽しさを共感し、こどもが表現して伝え合うことをサポートする立場であることを重視している。

こどもに関わるのは保育者だけでなく、様々な人と出会う体験が大切だと考えられる。こどもたちの様々な表現活動を読み取り、サポートする「コミュニティコーディネーター」や「芸術士」といった、保育者と協力しながら保育活動をサポートできる雇用と連携体制が整っていることが豊かな人的環境を生み出していると考えられる。また、実践を教育研究と結びつけて保育者と保護者の連携を築く「ペタゴジスタ」は、日本では教育機関の研究者に当てはまるが、レッジョ・エミリア市のように研究者が複数園を統括して受け持ち、保護者支援も行うような体制は、日本では実践されていない。また、現状では保育者だけで地域とのつながりを築いていくことは困難である。まちの保育園・こども園のようなまちと園をつなぐコミュニティコーディネーターの職員や、芸術士と園を調整する NPO 法人アーキペラゴのような団体の存在が必要である。そして、園の環境と空間を活かした地域と園をつなぐコミュニティスペースを確保することも、こどもを取り巻く人的環境を豊かにすると考えられる。

8. こどもを取り巻く人的環境をつなぐプロジェクト立案の授業展開

本学の 2018 年度前期に開講された 2 年生を対象とした「こども学」の授業において、現代の保育課題であるこどもの貧困、子育て家庭の孤立化、地域関係の希薄化などをテーマとした講義を行った。学生たちは小グループに分かれ、テーマに関する新聞記事を読んで調べ学習をしていき、対

策や考察についてスライド発表を行った。その後、授業でレッジョ・エミリア・アプローチのDVD視聴、まちの保育園・こども園の保育の取り組み、芸術士のいる保育所の活動について紹介した。そして、学生たちがグループでこどもを取り巻く家庭と保育現場、地域をつなぐプロジェクトを立案し、スライド発表を行うことにした。学生たちは、これまで一斉保育の指導案を計画する経験はあったが、家庭や地域とのつながりを意識した保育や長期的な視点で計画を立てたことはなかった。その為、当初は保育者主導の活動になっていることや、その場限りの交流会になっている内容もあったが、教員との話し合いを繰り返す中で、企画の背景、目的、コンセプト、実施案、対象、協力団体、スケジュール、予算などを具体的に考えていけるようになった。指導する上で重視した点は、こどもの主体的な活動になっているか、こどもだけでなく家庭や地域住民、保育者にとっても無理がなく楽しさが共有できる内容であるか、イベント当日の為の計画ではなく、ヒトやモノとの出会いや過程を大切に、イベント後も継続的なつながりが生まれる計画になっているかなどである。発表された内容には、こどもが地元にある身近な仕事を体験することで、地域住民との交流を図り、地元愛を深めるプロジェクトなどがあった。具体的には、地元の商店街などで仕事を体験した後、こどもたちでそれらのお店を製作し、保護者や地域住民を園に招く案である。また、こどもたちが地域を探索し、身近な生き物を発見・撮影することで、仲間と協力することや探求心を育むプロジェクトもあった。具体的には、こどもたちがグループに分かれ、地域の生き物に詳しい住民や保育者と一緒に身近な生き物を発見して写真に撮り、アルバム制作を行う案である。独創的だったのは、本学の図書館を利用し、学生とこどもで考案した理想の図書館を作るプロジェクトである。具体的には、図書館内に地域のこどもたちと一緒にキッズスペースを作ることや、こどもも利用したくなる本や設備の提案、こども向けの司書体験イベント、地域の人材を活かした絵本・読み

聞かせイベントを定期的に行うことなどが計画されていた。その他にも、農家でのどろんこ遊びと田植え体験から収穫後のおにぎりパーティーを行うまでの1年間に及ぶ長期的なプロジェクトも発表された。これらのこどもや家庭と地域をつなぐプロジェクトを立案できたのは、こどもを取り巻く人的環境の課題を学生たちが主体的に学び、こどもを取り巻く家庭や地域と連携する保育の必要性を実感し、具体的なまちの保育園・こども園や芸術士のいる保育所の取り組みを学んだからだと考えられる。

9. おわりに

本研究では、こどもを取り巻く人的環境の連携の意義と具体的な活動方法をレッジョ・エミリア市の乳児保育所と幼児学校、東京都のまちの保育園・こども園、高松市の芸術士のいる保育所の取り組みから考察し、授業の展開を検討することを目的とした。

これらの活動の理念と特色、人的環境を文献や見学から考察した結果、専門性の高い人材から知識や技術をこどもに教えることを目的とするのではなく、こどもの内側から湧き上がる創造性を引き出し、主体的で豊かな表現活動の中で、こどもの言葉や表現から想いを汲み取り、記録・共有していくことをサポートする豊かなコミュニティづくりの実践であることが理解できた。また、専門家と保育者が共同することで、質の高い保育を保障できる。その為には、地域の専門家との関係を築くこと、専門性を保育へ展開するために保育者が協力すること、継続的に活動を維持していくことが必要になると考えられる。こどもを中心として、それぞれの地域に即した人的環境をつないでいくことが、これからの保育の重要な視点になっていくと考えられる。未来の保育を担う養成校の学生においても、このような活動を学び、共感していくことが必要になるだろう。今年度は、研究と並行して授業での取り組みの紹介と学生によるプロジェクト保育の立案を実践した為、理念や特

色に関する説明が不十分であった。今後の課題としては、第一に現代の社会の変化に伴うこどもを取り巻く人的環境の課題について、学生が主体的に学ぶ中で保育所保育指針、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の改定とのつながりも理解できるように展開することである。第二に、こどもを取り巻く家庭や地域などの連携に取り組んでいる保育実践を引き続き研究し、講義に活かすことで学生の学びの理解度や意識の向上などに効果があるかを調査することである。第三に、こどもを取り巻く人的環境の一つとして、大学の環境や学生、教員がどのように保育現場や家庭・地域と連携していくかを検討していくことである。今回の「こども学」のような授業を通して興味・関心を持った学生がボランティアとして保育に参加する中で、こどもの興味・関心がどのように生まれ、主体的な保育に展開されていくかを定期的に観察・記録し、大学で発表を行うことができれば、これらの質の高い保育を学ぶアクティブ・ラーニングの一つとなるのではないだろうか。そして、今後、こどもを中心としたまちづくりが全ての人にとって幸福な環境の実現となることが共有され、それぞれの地域の特性を活かした連携とその活動をサポートする専門的な人材の配置が進むような働きかけを検討していきたい。

引用文献

- 1) 丸田 愛子「保育者の専門性を理解する主体的学びの検討(2)」、鹿児島女子短期大学、『鹿児島女子短期大学紀要』54号、2018.2、p.99
- 2) 小島 千恵子「こどもが主体的に学ぶためのカリキュラム・マネジメント：3歳未満児の保育から3歳以上児の保育への連続性(指針の改定をふまえて)」、名古屋短期大学、『名古屋短期大学研究紀要』56号、2018.3、p.18
- 3) 丸目 満弓「乳児保育における保護者支援研究(1)一連絡帳の記述文字数及び保育士－保護者間の応答率の分析一」、大阪総合保育大学、『大阪総合保育大学紀要』12号、2018.3、p.73
- 4) 相浦 雅子「こども理解に関する一考察」、別府大学短期大学部、『別府大学短期大学部紀要』37号、2018.2、p.60
- 5) 佐藤 学、ワタリウム美術館『驚くべき学びの世界：レッジョ・エミリアの幼児教育』、株式会社 ACCESS、2011、p.7
- 6) 前掲、佐藤、p.8
- 7) 松本 理寿輝『まちの保育園を知っていますか』、小学館、2017.3、p.10、15
- 8) 前掲、松本、p.87

参考文献

- a) レッジョ・チルドレン、ワタリウム美術館『こどもたちの100の言葉－レッジョ・エミリアの幼児教育』、日東書院本社、2012.10.
- b) アレッサンドラ・ミラーニ『レッジョ・アプローチ 世界で最も注目される幼児教育』、文藝春秋、2017.11.
- c) 秋田 喜代美、松本 理寿輝、まちの保育園・こども園、『私たちのまちの園になる：地域と共にある園をつくる』、フレーベル館、2016.11
- d) NPO 法人アーキペラゴ「取り組みについて」、『あーとなほいくがはじまったよ 芸術士のいる保育所』、
http://geijyutsushi.archipelago.or.jp/?page_id=701、2018.11.23.

奥 恵 (埼玉東萌短期大学専任講師)

